

タイトル:平成 17(2005)年度 教育セミナー

日時:平成 17 年 7 月 26 日(火)～29 日(金)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

山尾 大(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において、7 月 26 日から 29 日にとり行われた中東・イスラーム教育セミナーは、極めて刺激的で有益なものであった。教員スタッフによるセミナーや受講生の研究発表は、いずれも興味深かったが、本セミナーの積極的な感想は、以下の 3 点に要約できる。

第 1 は、教員スタッフに関してである。中東・イスラーム教育セミナーであるため、中東や「イスラーム世界」を広くカバーするセミナーが期待されるが、その期待に裏切ることなく、スタッフの専門はイラン、トルコ、アラブ、インドネシアと幅広いものであった。そのため、各セミナーにおいて多様な教育を受けることができ、極めて刺激的であった。付言すれば、専門地域のみならず、各教員の方々のディシプリンも、歴史、人類学、宗教学と多様であり、議論の中身、立論の方法などを比較できるという意味において、興味深いセミナーであった。

第 2 は、多様な分野の院生が集まったことである。院生の専門が、歴史、文学、開発、地域研究、言語など多岐にわたり、発表や質疑応答の場のみならず、懇親会や休み時間などの会話においても、多様な意見に接することができ、視野が広がった。それと同時に、分野やディシプリンの異なる研究者に対して、どのように自らの議論を展開し、理解してもらえばよいか、真摯に考えさせられる好機となった。

第 3 に、今後の研究会、学会における議論、質疑応答の練習になったことである。自らの大学院のゼミを出て、しかも他分野の人々と議論することは一筋縄にはいかない。その意味において、「教育」セミナーの意義は大きいと感じる。

以上のことにもかかわらず、提案として改善点を挙げるとすれば、それは以下の 2 点である。第 1 は、全体を通して、もしくは個々のセミナーにおいて、教官の方々の研究の方法論、フィールドの手法、資料の所在など、研究の基礎技術に関する議論があってもよいという印象を受けた。「教育」セミナーの性格上、研究方法の教授は包含されるであろう。第 2 は、セミナー後の議論にも上がっていたことであるが、合宿形式のセミナーに関してである。首都圏の参加者の不利益、拘束時間の長さなど、批判はあるが、利点も多いと考える。セミナー以外の場における議論が深まることが最大の利点であろうが、時間をつめて行えば、日程も短縮され、その分拘束時間も短くなるかもしれない。しかしながら、これらは提案であり、不満ではないことを付け加えておく。

総じて、本セミナーは刺激に満ち、極めて有益なものであった。今後もぜひ継続して行われることを望むと同時に、私自身も再度参加させていただくことを切望する。本当にありがとうございました。

大島 史(東京外国語大学大学院地域文化研究科)

学部、大学院と中東イスラーム研究に関わりながら、この研究セミナーに参加して改めて実感したことが2点ある。1つは中東世界の多様さとイスラーム世界の広大さであり、もう1つは中東・イスラームという研究対象について歴史学、政治学、人類学といった多様なアプローチのあり方である。まず最初の点であるが、筆者はトルコという地域から研究に入ったため、イスラームそのものについて、あるいは中東というトルコの周辺環境について深く考えることがなかった。しかしセミナーの中でイランという地域の多様性、インドネシアやマレーシアというもはや中東よりも多くのムスリム人口を抱える地域の現状を知ることになった。第二点目については、このセミナーはこれから博士論文の構想を立て執筆を始める筆者に研究手法のあり方を改めて考えさせてくれた。筆者は現在まで政治学や歴史学という手法を中心にしてきたが、人類学という手法を改めて見直すことができた。これから研究手法を変えることはないにしても、積極的に現地に行くことが多い筆者にとって、フィールドワークという手法は取りやすいものであり、研究にも活かせることができよう。

セミナーの感想を簡潔に言えば密度の濃い充実した4日間であったと言う表現に尽きるだろう。学会や研究会等で顔見知りの仲でも、こんなに長時間を共にする機会は滅多にないし、何よりも満足であったのが各分野を代表する先生方の貴重なセミナーである。普段は著作や論文を読むことでしか知り得ない先生方の話が次から次へと拝聴できるのはなんとも贅沢なことである。

最後に今後のセミナーに期待することは、中東・イスラームというテーマのもと、さらに多様な地域、民族を取り上げる機会を提供することである。例えばサハラ以南のアフリカなどは急速にムスリム人口が増加している地域であるし、マレーシア、インドネシアはもちろんフィリピン、タイなどもイスラーム運動の新たな温床となっている。あるいは中東には、その安定を左右するクルド、イスラエルといったエスニシティや宗教が存在する。それら無くして中東問題を語ることは不可能である。現在イスラームが世界情勢を左右する大きな勢力となっていることを考慮し、今後もより発展的な教育研究の機会が与えられることを期待したい。また今後も研究を重ね教育セミナーにも参加したいと思う。

幸加木 文(東京外国語大学大学院地域文化研究科)

糧となる経験

作家・阿刀田高氏による「たった一人の聴衆」というエッセイがある。多数を相手に発せられるメッセージが、結果としてたった一人にだけ切実に届くことがあるという微妙なコミュニケーションの存在について述べているものである。今回、教育セミナーを受講しながら常に私の意識の底にあったのは、自分はその「たった一人の聴衆」たりえているかということであった。

台風接近の足音を聞きながら始まった 2005 年度「中東・イスラーム教育セミナー」は、中東およびイスラーム地域において様々なフィールドとご専門を持つ先生方が、それぞれ数十年に及ぶ研究のエッセンスを紹介しつつ、研究における視点や現状の問題点などを1時間で講義し、その後1時間の質疑応答をするという形式で、4日間開催された。

前々から楽しみにはしていたが、期待以上に充実したセミナーであった。紙幅の都合上、内容には触れないが、多くはどこか重そうな口調で始められる講義が、話が進むにつれて熱を帯びてくる。講義内容は多岐に渡り、どれだけ十全に理解できたかは分からないが、新たな知見や視座に接するとともに、研究に対する情熱や熱意もよく伝わってきた。また質疑応答では、研究対象にいかに関心するかと、自分にとって切実かつ直球な問いをも正面から受け止めてくださり、数々の得難い示唆を返球していただいた。

さらに、先生方による講義に加えて、受講者のうち応募段階で希望した人のみが研究発表を行った。彼らが受けていた種々の指摘や批判を、自分も当事者のように(慄きつつ)聞いていた。それは自己の研究の軸が定まっていないことの証左でもあろうが、まさに「教育」に資するコメントが相次ぎ、刺激のかつ貴重なやり取りが身に沁み次第である。しかし一方で、たとえどんなに勉強不足が露呈しようとも、これだけ多彩な先生方、学生の皆さんの前で自己をさらす経験、つまり自分の研究発表は、買ってでもすべきではなかったか。博士前期課程(修士課程)1年目の現時点で受ける批判や指摘は、すべて今後の糧になっただろうと今は思っている。

以上が「感想」である。またその立場にはないと思うが、若干の「評価」を付記させていただく。

初年度ということで実施にあたり試行錯誤がなされたようであるが、開催案内から選考過程、そして当日の運営・進行に至るまで様々な配慮とサポートが行き届き、受講者の一人としては何ら不安なくセミナーに集中することができた。セミナーの成否は、受講する個人が、提示され与えられたものをいかに食欲に獲得し吸収するか、どれほど真剣な姿勢で臨むかにも大きく関わってくるものであろう。次年度以降も継続的に開催される見込みとのことであるので、今後受講を検討される方にとっても「たった一人の聴衆」として自身に切実に響く知見が得られる機会となるかもしれない。小文も何らかの参考になれば幸いである。

最後に、セミナー実施にあたり、先生方はじめスタッフの方々が払われたご尽力とご配慮に対し、深く感謝申し上げたい。

久志本 裕子(東京外国語大学大学院地域文化研究科)

私は今回、教育セミナーの前の週にすでに五日間の「イスラーム研究セミナー」に参加していた。五日間の濃密な議論を経て、新しい情報で頭がすでに飽和状態になっていたと思っていたので、教育セミナーに入ったときはどこまで集中力が保てるものか、正直なところ不安を感じていた。だが、「研究セミナー」とは全く異なるアプローチの研究発表が続いたこと、そして「研究セミナー」にはなかった先生方のお話を伺えたことで、自分でも驚くほどに知的好奇心が刺激されつづけることになった。

何より印象的であったのは、先生方の様子であった。私も含め多くの学生はおそらく、たくさんの先生方の前で発表するのであるからよほど専門的な話をしなくてははいけないだろう、というプレッシャーを感じていたのではないだろうか。けれども、少なくとも私の目には、先生方は学生の研究が進む方向にアドバイスを与えると共に、議論を楽しんでいらっしやるように見えた。先生方のプレゼンテーションからも、研究への思い入れがひしひしと伝わり、これまでの先生一人と多数の学生、という形の大学や大学院の授業ではあまりみることのできなかった「研究者」の姿をみることができたように思う。こうした言葉にならない研究の姿勢といったものを見せ、議論の場を体験させることが、何より「教育セミナー」という名にふさわしい成果ではないか、と感じた。

ただ、研究セミナーの密度の濃さに比べると、当然ながら全員の研究内容などについて理解を深めることができなかった。自己紹介の時間が長く取ってあったが、代わりに研究内容を少し長く発表する時間がそれぞれあっても良かったのではないかと思う。だがここでの出会いを生かして別の企画を参加者の中でしていくことも十分に可能である。学会とは全く異なる形のこうした交流の場が存在することは、非常に重要であろう。修士課程の学生の方が主であった多様な発表内容からは、これまで触れることのなかったことを学んだ。また参加者の中からは異なる研究領域の発表にも、質問がどんどん出されるのには驚き、自分の視野の狭さを省みさせられた。本当に貴重な機会を得たことに感謝するとともに、今後一人でも多くの方が同様の機会を得られることを望んでいる。

光成 歩(東京大学大学院総合文化研究科)

四日間のセミナーは、いろいろな意味で大変有意義なものでした。まず、全日程で先生方と大学院生による発表・議論が行われましたが、研究分野ごとのアプローチの多様さには“驚き”を感じてしまいました。私にとっては神学、歴史学、文学といった分野の議論のほとんどは聞いているのが精一杯で、そのことは「イスラーム」を学び研究するということはどういうことなのか、自明であったものが謎に変わってしまうような体験でした。これはひとつには私自身の視野の狭さ、勉強不足のためであり、またイスラームそのものの膨大な時間・空間・哲学的な広がりのためでもあるように思います。率直に言えば、私にとってのセミナーは、ある知識を学んだ、イスラームや中東についてより多くを知った、自分の研究の具体的なヒントを得た、といったものではなく、むしろ分からないこと、知らないことがどんなに多いかを知る、そういう機会でした。

しかし先生方や参加者の方々の活気ある議論に触れ、研究の果てしなさを知ると同時に、そうしたものに立ち向かってゆく意欲も湧いてきました。発表やそれ以外の場での情報・意見交換から、参加者の方々の意欲や志を強く感じました。このセミナーで、博士・修士院生の方々と知り合い、交流する機会が得られたことは、本当に幸運だったと思っています。

今後、修士論文の構想にむけて、自分の問いや方法論の限定が何を理解するためなものなのかを問い直し、位置づける力を養っていきたいと思います。準備を重ねられたセミナーから得たのはそれだけなのかとお叱りを受けるかもしれませんが、またこのような機会を得たときには、より多くを学び、考えることができるよう、精進していきたいと思います。大変お世話になりました。ありがとうございます。

辻 明日香(東京大学大学院人文社会学系研究科)

教育セミナーの4日間は、セミナーの時間も休憩時間も刺激に満ちていた。特に普段あまり交流の機会がない、NGOなど現代の問題に関心を抱いている方々や関西圏の方々と意見を交換できたことは、非常に有益であった。

セミナーに関していえば、幅広いディシプリンの研究者から、それぞれの地域や分野に関するレクチャーを受けられたことは貴重な体験であった。学会や研究会では質疑応答の時間が限られていて、質問の機会を逸することが多い。多忙の中先生方が質問に1時間以上も時間を割いてくださったことは、それだけでもこのセミナーの収穫であった。

同様に、発表された先生方がご自分の持っている情報を積極的に開示する姿勢は、研究者を志しその初期段階にいる者に対し、研究者のあるべきスタンスを示されたものであり、勉強になった。

受講生による研究発表に関しては、質疑応答が発表者と質問者の一対一の関係に限定されがちであったことに不満が残った。円卓ではなく、講義形式の机の配置であったため仕方がないことではある。けれどもセミナーの参加者が互いに発表に関して意見を交換できるディスカッションの時間があっても面白いのではないかと思う。

また、自分自身の勉強不足に起因することではあったが、研究発表の内容に関して知識不足であったことがしばしば悔やまれた。質問時間が内容確認に終始してしまい、踏み込んだ議論になる前に終わってしまう。これには専門分野が違うからこそ、全く異なる視点からの質問が出るというメリットがある。しかし、発表の内容に関する知識をある程度共有しておいてもよいのではないだろうか。歴史学研究会西洋史部門の月例会のように、発表者が事前にアクセスしやすい参考文献を紹介しておいたり、主催者側がセミナー開始前に必読文献を挙げておいたりすることも、修士課程の学生を対象とした教育セミナーとしてはよいのではないだろうか。

イスラーム研究を志す者が未だに少数であるため、周囲に相談できる研究者や同年代の切磋琢磨できる仲間がいなかった例が多い。このプロジェクトが来年度以降も開催され続けることを願っている。とっております。

高尾 賢一郎(同志社大学大学院神学研究科)

今回のセミナーは博士前期課程の学生を中心としたものであるという点で、日頃の研究会等で研究者間の細かい情報交換が行われるのに対し、自分が前期課程において行ってきた、またこれから行っていく研究について、今一度問題設定から検証する為の絶好の機会になるのではないかと期待し、私は参加を希望させて頂きました。日程が都合4日間に渡るといことからまた、自ずと参加者全員が研究方法を再考、そして論じる運びとなることには確信がありました。

事実、教員のセミナーにおいては教員自身の問題意識や研究方法から始まり、且つそれは人類学や歴史学等の、各分野の特徴や立場を明確にさせながら行われたものでした。人類学の立場から見た、人類学と地域研究の違い等は、正にその学を冠する研究者が一生において考えていかなければならないテーマだと思います。また受講生の発表においても、発表自体は修士論文に向けた動向や蓄積がその主な内容でしたが、発表時間と同等以上に時間が割り当てられた質疑応答では、その発表者の学問分野におけるテキスト解釈、概念設定等の特徴について、多く意見交換をする機会に恵まれました。発表者自身の研究のブラッシュアップに資することが多い研究発表において、このように多様な学問分野の研究者が集まることで、参加者全員が余すことなく学びを得るというのは大変貴重な成果です。

中東及びイスラーム研究は、イスラームを主な対象として、他分野に股がる横断的な学問研究がなされてきています。従って私は、そのイスラームという対象があらゆる学問方法に捉えられ得るものか、或いはまた既存のどの学問方法によっても捉えられ得ないものか、という疑問を常に持ち、未だ明快な答えを出せないままです。イスラームという対象から生まれ、20世紀後半に誕生した「イスラーム学」という専門分野がどこまで研究方法として独立し得るものかも、私の未だ知るところではありません。今回、従来の学問方法がイスラームというものの新しい地平をどれほど生み出し得るかについて、各専門分野の研究者がその問題意識を共有し合うことができたことで、自身の研究がやはり学問という世界において位置づけられるべきものであることの重要性を再確認することができました。

過ぎてみれば4日間というのは大変に短く、その間に得た問題設定や研究方法についての認識や訓練を、私自身の研究テーマに対してどのように生かしていくのかというより実践的な試みは、所属大学の研究室に課題として持って帰ることとなりました。惜しむらくは、今回は大学との折り合いがつかず私自身が発表するには至らなかったのですが、来年度以降、次回は研究セミナーにおいて、教育セミナーで学んだことを踏まえた発表ができればと思っています。

仲橋 源太(広島市立大学大学院国際学研究科)

私は研究セミナーに引き続き参加させて頂いたので、2つのセミナーの違いを感じた。そこから教育セミナーの良さと、これからの可能性について述べる。

まずは研究セミナーとは違ったタイプの多くの仲間に出会えた事だ。博士前期課程の人がメインなだけあって、若いエネルギーに溢れ、地域やディサプリンも大別出来ない程、多様なバックグラウンドを持った人達が集まっていた。私はイスラーム研究を行っていながらフィールドはマレーシアであり、中東などの知識が不足していたので大変勉強になった。

2つ目は先生方の貴重な講義があった事だ。お陰でイスラーム研究において重要な地域がほとんどおさえられており、セミナー全体にまとまりが出来ていた。それに東京外国語大学の先生方の他に、外部の先生も招かれており、より開かれたレベルの高いセミナーになっていたと思う。

このように若さと多様性溢れる参加者と経験豊富な先生方が交わり合う事によって、素晴らしいセミナーになった。先生や学生といった垣根も無く、活発な議論が交わされ、高度な知的交流が行われていたのだ。また研究セミナーと比べて、打ち解けた雰囲気、質問しやすく、全体的に盛り上がったと思う。懇親会では若者同士、何でも気軽に話せ、お互いの大学の情報交換をしたり、先生方のユーモア溢れる一面を垣間見る事も出来た。これも共に4日間過ごした連帯感からであろう。

昨今の世界情勢の中で益々イスラーム研究の重要性が増す事が予想される。このセミナーに参加した若い研究者の卵達と、すでに活躍されている先生方との交流によって、日本のイスラーム研究は、今後も世界に重要なメッセージを発信し続ける事が出来るだろうと思った。そしてより多くの人に、交流の輪に入って欲しいと願うと同時に、記念すべき第一回目に参加出来た事に感謝する。

最後になりましたが、大変お世話になった先生を始め、事務の方や参加者の皆さん、どうもありがとうございました。

貝原 加奈(神戸大学大学院国際協力研究科)

4日間のセミナーを終え振り返ってみると、このセミナーは、私が予想していたものとは少し違っていたように思う。それは、自分が専門としている国際関係論において、『中東』、もしくは『イスラーム』という言葉を使用する際、その言葉が含意するものが、例えば、歴史学や神学の『中東』、『イスラーム』が含意するものとは異なっていたからではないだろうか。他の受講生の発表を聞く際に、そういった専門分野間での、“感覚”のずれが、発表の内容を理解する上で、ひとつのネックになっていた。

ただ、その分野間の違いを、異なるものとして放置しておくのではなく、先生方も含めた受講生全員がそれぞれのアプローチ方法に興味を持ち、積極的に議論に参加している姿を見ることができ、自分の視野を広げるためにも非常に有意義であったと感じる。また、セミナー中だけではなく、休憩時間やセミナー後の時間を利用して、さまざまな研究分野の受講生の方々と交流をもてたことは、貴重だった。今、私の周りで中東・イスラーム地域を研究対象にしている学生は非常に少なく、意見交換するチャンスも少ない。加えて、私自身、中東・イスラームに関係のある地域を研究対象としようと決めたのが、ほんの最近で、右も左も分からない状態だった。このセミナーで、研究分野は異なっても、「中東・イスラーム」にまつわる研究をしている多くの学生に出会えたことは大きな収穫だった。この出会いを大切にしていこうと思う。

さらに、他の受講生の発表や議論を聞く中で、自分の専門での知識がまだまだ足りないことを改めて痛感できた。このセミナーで学んだ、アプローチや考え方、議論の進め方、理解の深め方を参考にし、自分の論文に生かしていければと考えている。

何回か他の形式のセミナーに参加したことがあるが、そこではセミナーの中で、提起された問題が一旦完結する、もしくはしなければならぬような雰囲気があった。このセミナーではそういったものはなく、それぞれがここで学んだことを持ち帰って、どう自分の研究に反映するか、により焦点が置かれていたように感じた。

また、4日間という短い期間ながら、セミナーの進行もスムーズで、大変気持ちよく受講できました。先生方、事務の方々ありがとうございました！！

矢野 可奈子(京都大学大学院人間・環境学研究科)

本セミナーの最大の魅力は、研究の対象地域や分野は違うものの中東・イスラームというゆるやかな、しかし大きなつながりの中で、それぞれ違った研究テーマや地域への具体的なアプローチの仕方を知り、学び、影響を受けた点にあったと思う。自分の研究地域や思考の枠組みばかりに捕われがちになるなかで(特に私の研究科では)、今回のセミナーを通して他地域への視野が広がり、他の方々の問題の設定や着眼点がほんとうにさまざまに色々な研究の可能性があることに今さらながら驚いた。私の研究対象はパレスチナという中東地域ではあるが、テーマは直接イスラームに関わることではない。だが、パレスチナ社会を見る上で、宗教であり社会規範でもあり、文化・文明であるイスラームの理解を決して軽んじることはできないということ強く感じた。パレスチナのムスリムが生きる現実を知る上で、彼／彼女たちが持つイスラーム観を断片的にも感じ取ること。そういう意味で、大塚先生の仰った点―「彼／彼女たちの生活の中に息づくイスラームなるものを見出していこうとする」―が私の研究には決定的に不十分である。イスラームが分かればパレスチナ社会が分かるというのは、キリスト教が分かればイギリス社会／フランス社会が分かるというのと同じくらい暴力的だが、それでも、パレスチナという政治的に困難な場所の内側を見ていくなかで、世俗的な政治の動きや世俗的な思想に盲目的に寄った観点からパレスチナ社会を眺めることもまた暴力的で、「生活の中に息づくイスラームなるもの」を生きる人びとの現実を見損ねてしまう。

全体的には、セミナーのプログラムや進行方法は満足のいくものだった。合宿形式を望む声もあったが、運営側の負担や、束縛のなさ、自由に思考できる時間を考えると、私は今回のように午前・午後を十分に使って充実したプログラムにする方が良いと思う。内容的には、連日決められた時間内の発表と短時間の質疑応答の繰り返しで少し単調に感じないこともないので、午後の時間をフルに使って一つの発表とその中での問題設定・ディスカッションを入れたり、フィールドワーク的なセミナーを盛り込んでメリハリをつけるなど、工夫した内容にするのも良いのではないかと感じた。また、細かいことになるが、初日の交流会を立食形式にした点はすごく良かったと思う。座敷やイスだと話せる相手が限られてくるが、自由に移動できる立食だと皿とコップを手に持ち多くの人と複数で話し、動き回ることができる。情報交換もし易い。

最後に、初日に台風が接近しどうなることかとハラハラしましたが、このような有意義なセミナーに参加させていただいたことに感謝します。先生方、運営して下さった方々、どうもありがとうございました。